天理大学人権問題研究室紀要　第15号：31―52，2012

満州「天理村」異聞

池 田 士 郎

A Study of the History of Tenri-Village in Manchuria, China North-East Area : An Alternative Interpretation

IKEDA Shiro

１．はじめに

天理教が満州（現在の中国東北部。以後，本文では当時の呼称としての満州を使用する。また，表記は満洲ではなく満州とし，当時の用例として満州国という国号も使用する。また，略称として北満や渡満など当時慣用されていた表記も用いる）との係わりをもつようになったのは，日本が日露戦争でロシアから遼東半島と南満州鉄道等に関する権益を獲得した後のことである。正確には分からないが，当時の信者が個人として関係機関や付随する仕事に就く形で満州へ渡り，その後，その人びとが所属する教会へ布教師を派遣するように依頼して天理教の信仰が満州へと伝わっていった。その最も早い時期のものとしては，奉天会戦直後と言ってもいい明治38年（1905年）４月に安東県に赴いた高部直太郎の安東布教があげられる。同氏の布教は６年後の明治44年２月７日に安東宣教所（宣教所とは現在の分教会のこと）の設立という成果をみることになるのであるが，信者の多くは在留の日本人であったようである。そのことは，高部の後年の手記「満州布教について」の中で「それはもう日露戦争もすんでからの事で，（略）始めて布教に従事したのであります。よくお助けがあがりました。度々不思議な結構を頂きました。しかし私も偉さうには言へない方で，支那人の布教は極く少数なのです」（『みちのとも』大正14年２月20号）と述べられていることにも窺うことができる。だが，それに続いて，中国人の気質や宗教心についての感想が述べられており，中国語を習得することの大切さや人格・識見に優れた中国人信者が布教するようになることが理想だという視点で満州布教が語られている。

ところで，近代日本の植民地獲得と歩調を合わせる形ではあれ，日本人の移住に伴っていわば自然発生的に天理教の信仰が満州の地に広がっていくなかで，教団中枢の人びとによる満州布教の視点は少しく異なるものであった。その代表的なものとして松村吉太郎の「好望なる満州伝道」（『みちのとも』大正２年６月号）をあげることができるだろう。同年の春，満州各地を視察した松村吉太郎は満州に多くの日本人が渡って新しい植民地経営に従事している状況を見聞して次のような感想を寄せている。「私は今回一ヶ月余を費して，満州各地を視察して来ましたが，各地共非常な発展であって，至る処日本人が入込んで着々経営して居ります。日本人の居る処には必ず天理教信者が居ると云ふ次第で，神様

は言はず語らずの間にドシ〳〵満州の地へ信仰の種を御遺しになって居るのであります。（略）満州布教は本教発展の為めのみならず国運の発展と云ふ上から見ても，極めて大切な問題であります」と言い，なぜ大切と考えられるのかという点については，「満州は日本の勢力の大いに発展する土地であり，又，国防上から云っても大いに発展させねばならぬ土地であります」と指摘しているが，それは国家の視点と重なり合うものであった。

日本が南満州の特殊権益を獲得したのはロシアに勝利したからであるとはいえ，ハルピンを中心とした北満州は依然としてロシアの実効支配するところであれば，地政学上の観点からロシアを仮想敵国とした日本の満州経営が国防意識と一体となって始まったのは当然のことであろう。じじつ，満州経営の機軸となった南満州鉄道株式会社（満鉄）の初代総裁に就任した後藤新平は，西園寺首相からの就任要請に対して「満鉄総裁就任情由書」を提出しているが，その中で「今鉄道の経営に因りて，十年を出でざるに五十万の国民を満州に移入することを得ば，露国倔強と雖も漫（みだり）に我と戦端を啓くことを得ず」と見解を開陳している。[1] 先に見た松村吉太郎の「好望なる満州伝道」の視点の源流といえるだろう。

しかし，50万人の満州移民という後藤の目論見は，満州統治の根幹とされながらも半ば絵に描いた餅の状態が長く続いた。後藤が明治39年（1906年）11月に初代満鉄総裁に就任してから四半世紀近く経った1920年代末（昭和４年頃）には，鉄道事業を中心に満鉄は飛躍的に発展し莫大な利益をあげる大企業に成長していた。小林英夫の指摘によれば，満州に移住する日本人は約20万といわれているが，この間に満州の中国人は約１千万人から３千万人に増加している。[2] 大量の満州移民の送出という企図は国家の基本方針ではあったが，具体的な実効性をともなう政策とはなっていなかったといえるだろう。

こうした状況を一変したのが昭和６年（1931年）９月18日に勃発した「満州事変」であった。

２．満州事変と満州「天理村」構想の萌芽

増え続ける満州の中国人に対して日本人の満州移民は一向に増加する気配のない状態では，南満州の実効支配は危ういという思いが当時の関東軍内にあったであろうことは想像に難くない。いかに武力において優勢であったとしても，約20万の日本人が４千万人近い中国人が住む満州を支配することなど不可能だからである。じっさい，満州事変の推進役であった関東軍参謀石原莞爾は当初満州を直接軍事占領する考えであったが，[3] １駐剳師団約２万人と６箇の独立守備歩兵大隊１万６百人の関東軍だけでは軍事占領は不可能であることに気付き，[4] 旧東北軍閥系の将軍や官僚等を懐柔し，清朝最後の皇帝溥儀を担ぎ出して満州国という一つの独立国家の形態をとることに軌道を修正した。

ところで，石原莞爾らを中心とする関東軍司令部の参謀たちの意識のなかに，いつごろから農業移民の構想が芽生えていたのかは定かではないが，関東軍の組織に移民部が設けられたのは昭和８年（1933年）２月13日であり，特務部（部長は参謀長が兼務）の内部部署として設けられた。もっとも，その１年前には関東軍統治部が中心となって開催された「満蒙に於ける法制及経済政策諮問会議」で農業移民問題が討議されている。[5] したがって，移民入植地の配置と折衝には軍の意図が込められていたことは言うまでもない。

天理教でも「好望なる満州伝道」を説いた

松村吉太郎が大正２年11月に新しく設けられた満州布教管理所の管理者に任命され，それより教団内の機関紙等に時おり満州布教の状況が伝えられるようになるが，組織的な農業移民の問題が取上げられるようになったのは昭和６年（1931年）の満州事変後しばらく経ってからである。

教団は満州国建国直前の昭和７年２月18日に皇軍慰問使を満州へ派遣した。その時の皇軍慰問使なるものが具体的にどのような活動をしたのか詳細は不明であるが，チチハルやハルピン，吉林の北満各地でも日本軍を慰問したと『みちのとも』（昭和７年３月20号）は伝えている。元外交官の石射猪太郎の『外交官の一生』のなかに，その一端を窺わせる記述がある。その頃，石射は吉林総領事として満州事変前後の対応に腐心していた。その上，内地からの訪問者の応対も領事館の仕事の一つとしてあったようで，ことに事変後は多くの個人や団体の訪問を受けていたようである。その頃の回想に「宗教家は，神道も仏教も来た。慰問と公称しながら，実は教勢拡張が目的である。この種の慰問者は大抵まず領事館に来ては，乗り物の世話をしてくれとか，案内してくれとかいって，警察署を煩わした。しかるにある時，天理教本部からの慰問団が立ち寄った。私に対して丁重な慰問の辞を述べたのち，警察官慰労のしるしにといって金一封を残して辞去した。すぐ警察署長を呼んで包みを開けさせると金五十円也であった。感激した署長はお礼をいわなくてはとあたふた後を追った。何ら領事館を煩わすことなく，しかも慰労金まで置いていった者は，事変を通じてこの一団だけであった。私は天理教の頭のよさに，敬服せざるをえなかった[6]」とある。

この時の慰問使が旅順の関東軍司令部を訪問したか否かは分からないが[7]，少なくとも前掲『みちのとも』の記事によれば満州各地の日本軍を慰問したとあることからすれば，なんらかの接触があったとみるのが順当であろう。その関東軍は，昭和７年２月の時点では満州への大量の日本人移民が必要であることを認識し，同月に関東軍統治部が主体となって「日本人移民案要綱」などの基本方策を決定していた[8]。天理教の慰問使が満州を訪れた時には，既に農業移民の必要性は認識されていたのである。両者の接触がどのようなものであったのかはともあれ，この時の教団慰問使の帰国の半年後の８月に，青年会は満州に農業移民を送り出す目的で調査チームを派遣しており，その一行は関東軍司令部や満鉄本社，関東庁などを訪問すると同時に，満鉄農事試験場や各種農園を訪問調査している（『天理教青年会史・第４巻』90–91頁）ことからすると，天理教が本格的に満州農業移民を検討するようになったのは２月に派遣された皇軍慰問使の活動の結果であるといえる。

じっさい，慰問使の団長格であった深谷徳郎の帰国後の教団機関紙への報告「新満州国の瞥見」（『みちのとも』昭和７年５月５日号）では，満州伝道は自給自足で行うべきで，その方法として，「先ず大きな土地を求め，各所に天理教の集団移民を行ひ天理教村を設けて，一面布教すると共に他面開拓事業を盛にして，それより収穫したる果実を以って伝道費に充当するのである。先にも述べた如く，未耕地は沢山あって将来はいざ知らず現在では未耕地なれば一坪三厘乃至二銭位で買へる所もあるのである」と述べているように，天理教による開拓移民村の発想がみられる。これが後の満州「天理村」へとつながっていく構想であることは言うまでもない。

3．事変以前の満州布教の一斑

満州「天理村」の軌跡を追う前に，ここで一度立ち止まって，その頃の満州における天理教の布教の一斑を見ておこう。そのことによって，開拓移民村を中心とする布教構想の特異性がより鮮明に理解できるであろう。

満州布教の嚆矢は先にも紹介した高部直太郎の安東布教であるが，その後，多くの信者や布教師が満州へと渡って行った。その結果，大正２年（1913年）11月23日には満州布教管理所が奉天に設置されるまでになり[9]，その初代管理者には松村吉太郎が任命されている。この時，管理所の開筵式に現地の教会長として列席したのは安東宣教所の高部直太郎と大連宣教所の粕谷好助の二人であった。つまり，在満の教会は２箇所しかなかったということであるが，その３年後の大正５年の『みちのとも』３月号に掲載された「満州の天理教」という記事によれば，布教管理所から布教承認を受けた布教師は約40名に上り，教会は長春や遼陽などを含め６箇所に増えていた[10]。それら教会の中には満鉄から土地の無償提供を受けたものもあり，さらには満鉄全線の半賃優待券を下付された布教師は18名もいたという。

大正期にこれほどの満州布教が盛んになった背景には明治43年（1910年）からのロンドン布教に刺激され全教的に海外布教熱が後押しになったことは言うまでもないが，同時に，1910年代の半ば頃になると満鉄は飛躍的に「儲かる会社」へと成長を遂げ[11]，満鉄やその関連会社に就職する人びとの経済的な余力が多くの信者仲間や布教師たちを満州へ呼び寄せることにつながった。じじつ，満州へ仕事を求めてきた夫の伴侶が布教に歩いたという事例が『みちのとも』にも紹介されている。たとえば，大正６年６月号の『みちのとも』に村田慶蔵が「北満を巡教して」という報告を寄せている。村田は，ロシアの２月革命（３月12日ニコライ２世退位）前後に北満の中心都市ハルピン（哈爾賓）を巡教したが，赤い革命章のリボンを胸につけた大勢の市民が希望に湧きかえっているなか，ハルピンで布教する女性信者（長春宣教所に所属するも正式に管理所の認可を受けた布教師ではない）の主宰する哈爾賓集談所を訪問し，参拝者のなかに多くのロシア人信者や中国人信者のいることに感動している。特に，ロシア人女医が信者になっている様子を詳しく報告し，同誌の巻頭にその写真まで掲載している。村田の報告では当時のハルピンには約３千人の日本人がおり，総領事館内には小学校まで設けられているとある。

また，満州事変前夜ともいうべき昭和３年（1928年）３月５日号の『みちのとも』に，増野石次郎は「満州布教の将来」と題して次のように述べている。「満州の布教は，其の地盤は大体出来て居る。今後は之れをどう動かして行くか，どう動かして，之を奈何に大きくして行くかと云ふ問題である。そこで考へて見ると，満州には三つの中心勢力が根を張って居る。満鉄と関東庁とそれに張作霖…此の三勢力に対して，天理教はどう云ふ具合に折衝して行くか？　が今後の面白い問題である。然しその折衝の裏面には，天理教は一般民衆をどこまで動かして行くか，言ひ換へれば布教化して行くか，信仰化して行くか，お助けの実を挙げて行くか，によって其の折衝の成不成は規定されると云はなければならない」と満州事情を分析している。増野がここでいう一般民衆とは在満日本人ではなく，むしろ中国人やロシア人といった現地の人びとを念頭に置いていることは容易に読み取れ

るとともに，どこにも関東軍のことが意識されていないことは注目に価する。つまり，満州事変までは，関東軍との関係を窺わせる記事は皆無といえる。それは，当時の教団関係者が満州をめぐる国際関係に無知であったというのではなく，純粋に信仰の営みとしての満州布教ないしは「世界たすけ」という点に布教者たちの関心が向かっていたことの証左である。満鉄との特別な関係はあったにもせよ，関東軍の監督と協力の下で布教活動を進めることなど人びとの念頭にはなかったといえるだろう。

4．「天理村」構想の具体化

昭和７年２月に満州に派遣された皇軍慰問使一行がハルピンから長春への移動中の３月１日に，清朝最後の皇帝溥儀を執政とした満州国が建国を宣言しているが，おそらく慰問使の一行はそうした建国前後の高揚感のなか満州各地を巡回したに違いない。深谷の帰国後の報告「新満州国の瞥見」にはそうした高揚感を随所に感じとることができる。もっとも，そんな高揚感はひとり深谷だけの感受性のなせるものではなく，当時の大多数の日本人の受けとめ方であったことは言うまでもない。

だが，なかにはこの新しい満州国の建国に違和感をもつ人びとのいたことも事実である。たとえば，土屋文明は「新しき国興るさまをラヂオ伝ふ亡ぶるよりもあはれなるかな」「新しき国の主にゆく人の紅よそほしく立つといふラヂオ」（『文芸春秋』167頁，昭和７年４月号）と詠んでいる。この歌には満州国建国の高揚感はなく，むしろ一度世界史の舞台から退場させられた人を無理やり舞台に引き出して，見せかけの国家を作り出そうとする人びとの作為を「あはれ」と感じ，それを溥儀の「紅よそほしく立つ」姿の哀れさと重ね合わせているところに，土屋の歌人としての時代に対する批判精神の鋭さを感じる。それは，圧倒的な物量で展開される事変の報道に呑み込まれることなく，むしろ相対化して冷徹に見つめることの大切さを教えているかのようである。

ところで，満州国が関東軍の武力侵攻によって東北軍閥政権にとって代わった一つの中央集権国家であることは当時の日本の知識人にはかなり広く知られていることであった。それは教団内の知識人にとっても同じであったことは，先に見た増野石次郎も「満州には三つの中心勢力が根を張って居る。満鉄と関東庁とそれに張作霖」という観察力からも推量できる。事変以前は関東州と南満州鉄道の沿線に限定されていた日本の特殊権益を「日満議定書」によって北満州や熱河省，興安嶺地方まで含む満州国全域に拡大したのである。それまでも，日本の特殊権益は実質的には条約上よりも拡大運用されていたが，[12] 土地の購入などは商租権で対応せざるをえず，その買収は中国人の名義でしか登記されないために，法的には極めて不安定な土地所有の形態だったようである。[13] それが，満州国建国後は日本の商社や個人が直接土地を購入することができるようになり，急速に満州各地で日本人による土地の買収・集積が行われるようになった。深谷の報告「新満州国の瞥見」は「将来はいざ知らず現在では未耕地なれば一坪三厘乃至二銭位で買へる所もある」と図らずもその風聞の一端を紹介している。「一坪三厘乃至二銭」とは，金融恐慌後のいかに不況の時代といえども安すぎる値段ではあるが，あながち根拠のない風評とばかりは言い切れない。劉含発の研究「日本人満洲移民用地の獲得と現地中国人の強制移住」（『アジア経済』XLIV

–4,23頁，2003年）によれば，東亜勧業株式会社は北満の中心都市ハルピン郊外の阿什河地区の農業移民団用の土地買収に際して，既耕地を１等から３等に区分し，１等地は時価の28%，２等地は30.6%，３等地に至っては18.4%の廉価で購入している。ちなみに３等地の購入金額は１垧（約2160坪）が24国幣元であったというが，日満通貨為替は１対１に近い相場であったことからすれば，[14] １坪１銭前後で買収されたことになる。

教団の皇軍慰問使が帰国して半年後の８月には天理教青年会が深谷の報告にある天理教による開拓移民村の構想を担う主体として調査チームを満州に派遣しているが，深谷はその中心メンバーの一員として再び渡満している。以後，満州「天理村」への移民事業は文字通り命をかけた彼の畢生の仕事となっていった。『天理教青年会史』第４巻（95–96頁）によれば，深谷は青年会が本格的に移民事業に取り組むための調査に赴いたが，その折に伝手をえてハルピン郊外の阿什河地区に約８千町歩の土地を購入する目途をたてて９月に帰国している。そして，帰国直後ともいえる10月26日付で，深谷は天理教満州伝道庁長兼天津伝道庁長に任命されているが，[15] これは満州「天理村」の企画がたんに青年会の事業として行うのではなく，天理教団あげての事業として推進することを示す人事でもあった。

昭和７年10月27日に開かれた第14回青年会総会で天理教としての満州農業移民団の計画が発表された。次いで満州伝道に関わりの深い初代の満州布教管理者であった松村吉太郎本部員が「満州伝道は，現在の我国家の状勢から致しましても焦眉の急でありまして，本教の荒木棟梁を以て自認する青年会が，此の目的の為に満州に志した事は，当然すぎる位当然の仕事である。（略）満州伝道，延いては海外伝道の第一歩としての満州殖民計画は，神意の実現であると同時に，国家の事業を翼賛するものである」と述べ，会員に奮起を促している。松村のいう国家の事業を翼賛するとは「五族協和」「王道楽土」の理想郷づくりに天理教としても協力するというということであることは言を俟たない。満州「天理村」構想はこうして実現に向けた具体化の第一歩を踏み出したのである。

当時の日本国内の世情は満州国成立に関するリットン調査団の報告に対して抗議沸騰の世論を形成していた頃である。だが，現実のハルピン一帯の治安を担当していた第十師団長の広瀬寿助中将は「悪いのは紳士も苦力（クーリー）も見分けなく支那人を侮辱する。これが為四月以来反日の気分が漲って来た。…町の中で支那の立派な婦人にからかふ。停車場で入場切符も買はずに入る，何だ俺の顔を見ろ，日本人だぞ，と怒鳴る。汽車の一等車へ入る。…食堂車を占領して大酒盛をやる，拳を打つ，歌を歌ふ。…ハルピンの郵便配達がいた，日本人が来て，その中に俺の郵便があるだろう，見るから下ろせ云ふた，それはいかぬ，と云ふことから殴って大怪我をさせた」とにがりきった様子で政友会代議士の篠原義政（群馬県選出）に語ったというのが「五族協和」「王道楽土」の満州の実態のようであった。[16]

５．土地購入をめぐって

ここで，満州「天理村」の土地購入問題とその背景について少し詳しく見ておこう。というもの，土地の購入という商行為は日本の満州支配の根幹に関わるものであり，現地の人びとが日常生活の場面で日本の満州経営を侵略と意識する第一のものであったと思われるからである。結論から言えば，それは商行為というよりは収奪というにふさわしい行為

であった。しかし，移民村への入植者たちのほとんどは，そのような実状を知らなかったことから，自分たちが侵略者であるという明確な意識をついに持たないまま満州から引き揚げざるをえなくなり，戦後も引き揚げの苦難の歴史にしか目線が届かず，その結果，被害者の立場でしか満州体験を語ることができなくなってしまう例が多く見られる。[17]

こうした状況は満州「天理村」の場合にも見られる。以下に，『天理村十年史』と『天理教青年会史』第４巻の当該箇所から，土地購入に関する記述を拾い上げて，その軌跡をたどってみよう。

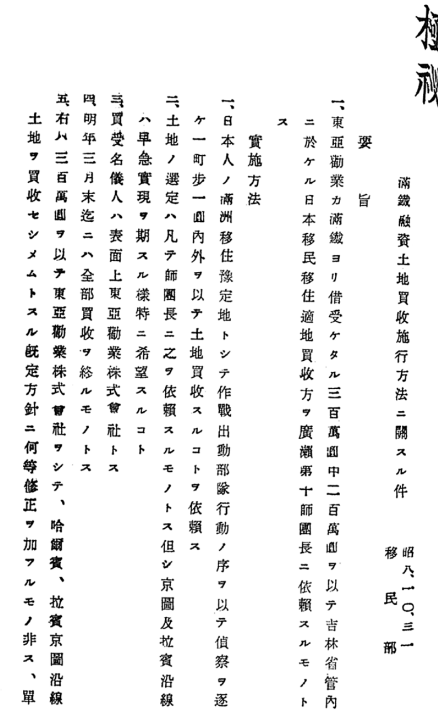
昭和７年８月，深谷は青年会の満州調査チームの一員として渡満の折に伝手をえてハルピン郊外の阿什河地区に8,000町歩の移民用地を購入する手はずを整えた。その手付金として10万円を東亜勧業株式会社に支払った。その年の10月に，青年会は移民事業の第一期の予算総額を百万円とする予算案を作成し，全国の青年会員に協力を求めるべく青年会総会に臨み，会員こぞってこの計画を全力で推進することを誓い合った。翌年の１月，計画が進捗するにつれて土地購入費総額は35万円と決められ，具体的な移民計画書を関東軍に提出した。２月には地主代表者との間で仮契約が取り交わされ，４月には吉林省長に「土地商租許可願」を提出し，計画は順調に進められていた。『天理村十年史』によれば，地主代表者との間で取り交わされた仮契約書では既に耕作されている熟田の上が100元，中80元，下40元，未耕地の上は40元，中20元，下10元（いずれも１垧当たり）と約定されているが，細目までは記載されていないため，この時の購入価格の総額が正確にいくらだったのかは不明であるが，仮に事務手続き諸費用や関係者謝金等を５万円として土地の代金が総額30万円だとすると，[18] １町歩37.5円で，１坪当たりにすると1.25銭となり，先に見た劉含発の調査とも一致する。また，天理図書館所蔵の橋本正治編『天理教青年会満州移民事業日譜・参考資料』全３巻（私家版）の第１巻に東亜勧業株式会社が作成した「阿什河沿岸土地買収要綱」（昭和８年８月）が残されているが，それによれば，最終的に土地代としては507,326円が計上されており，内訳の備考に「総面積7500町歩。熟地反当金９円２銭強。草荒反当２円６銭弱。柳荒反当金３円33銭強。平均反当６円60銭弱トナル。」(137頁）と記載されている。それにしても１坪平均2.2銭である。いずれにもせよ，深谷が「新満州国の瞥見」で紹介した風聞「一坪三厘乃至二銭」とほぼ一致している。

ところが，６月28日，関東軍より突然の中止命令が満州「天理村」建設現地事務所に伝えられてきた。ハルピン総領事よりの７月３日付の外務省宛公電[19]では天理教側の計画が「必シモ軍側トノ当初ノ約束ニ合致スルヤ否ヤ疑ハシキ点アリ」，さらには「当地特務機関ヨリノ通報ニ依レハ関東軍側ニ於テハ天理教側其ノ後ノ態度カ軍側トノ予テノ約束ニ違背シ更ニ軍ノ意図ニ反シタルノ故ヲ以テ」中止したとの説明があった。関東軍との当初の約束やその違背が具体的にどのようなものだったのかは『天理村十年史』でも『青年会史』でも述べられていないが，この買収が頓挫した理由を５点にわたってあげている中の冒頭に，現地人をはじめ多くの人びとが当該地域で既に耕作をしており，「仮契約の土地協定が不完全であったため，買収の実際にあたって紛糾を惹起し」（97頁）たことが『青年会史』に紹介されている。そして10月には，東亜勧業株式会社より手付金の内９万５百円余が返金されて，この時の土地購入問題は一応

の結末を迎えている。

教団あげての移民団の計画の頓挫は人びとに大きな打撃をもたらした。とりわけ，計画の実行主体であった青年会では落胆の色が隠せない様子を『青年会史』は「常務委員会においては，昭和８年７月上旬より再三その善後策を協議したが，その態度は次第に消極的になり，教内は最初の気勢をそがれて意気消沈の体であった」（98頁）と述べている。そんな青年会常務委員会に対し，７月23日，折から北米巡教中の中山正善二代真柱（青年会長兼務）より「青年会，ハルピンノ土地不首尾ノ故ヲ以テ最初ノ移民計画自体ヲ中止スル意ナルカ」（『天理村十年史』57頁）との叱咤の電報を受け，ようやく気を取り直して善後策を協議することとなった。また，10月27日の第15回青年会総会で記念講演に立った松村吉太郎本部員からは，「青年会本部にも責任があらうが，一度や二度の挫折で意気沮喪するやうでは，未だ誰一人成功したものゝない満州移民の雛型を作らして貰ふ事は到底不可能である。（略）軍の意向がどうであっても，この計画が国策に順応する最も意義ある仕事である以上，如何なる誤解も反対も中傷も押し切って，諒解を求めてやりあげるといふ強い決死の精神がなければならんのに，一寸の手違いですぐ中止を考へるやうではとてもこの仕事は出来るものやない」（『みちのとも』昭和８年11月20日号）と，出席した青年会員一人ひとりの覚悟を促した。こうして満州「天理村」の計画は息を吹き返した。

ところで，この頃，関東軍移民部の中では日本人移民団受け入れのための土地の買収方法に関して極秘裏に「満鉄融資土地買収施行方法ニ関スル件」（10月31日付）が決定された。[20] その要旨は東亜勧業が満鉄より300万円の融資を受け，その中の200万円で吉林省内


極秘

昭八、一〇、三一
移民部

滿鐵融資土地買收施行方法ニ關スル件

要旨

一、東亞勸業カ滿鐵ヨリ借受ケタル三百萬圓中二百萬圓ヲ以テ吉林省管內ニ於ケル日本移民移住適地買收方ヲ廣瀨第十師團長ニ依賴スルモノトス

實施方法

一、日本人ノ滿洲移住豫定地トシテ作戰出動部隊行動ノ序ヲ以テ偵察ヲ遂ケ一町歩一圓內外ヲ以テ土地買收スルコトヲ依賴ス

二、土地ノ選定ハ凡テ師團長ニ之ヲ依賴スルモノトス但シ京圖及拉賓沿線ハ早急實現ヲ期スル樣特ニ希望スルコト

三、買受名儀人ハ表面上東亞勸業株式會社トス

四、明年三月末迄ニハ全部買收ヲ終ルモノトス

五、右ハ三百萬圓ヲ以テ東亞勸業株式會社ヲシテ、哈爾賓、拉賓京圖沿線土地ヲ買收セシメムトスル既定方針ニ何等修正ヲ加フルモノ非ス、單

永田稠『満州移民参考資料　第３巻』日本力行会所蔵

に日本人移民を受け入れるべく「移住適地買収方ヲ広瀬第十師団長ニ依頼」するというもので，その実施方法としては「作戦出動部隊行動ノ序ヲ以テ偵察ヲ遂ケ一町歩一円内外ヲ以テ土地買収スルコトヲ依頼」するものとし，しかも「明年三月末迄ニハ全部買収ヲ終ルモノトス」という内容であった（**写真**）。先に頓挫した満州「天理村」の入植候補地阿什河地区の8,000町歩の買収にあたって，天理教側はおおよそ30万円を東亜勧業に支払う契約であった。つまり１町歩当たり37.5円ということになる。これに対して，関東軍移民部の同地を含む吉林省内の土地買収計画では「一町歩一円内外」で購入する方針を打ち出したのである。しかも，それを翌1934年３月末までに実施するというのである。これは，いか

に世界金融恐慌後の深刻な不況の時代であるとはいえ，ほとんど収奪というにふさわしく，とても商行為といえるものではない乱暴な土地買収の方針である。そもそも先の阿什河地区の土地買収に挫折したのは，そこに多くの農民が耕作をしており，その権利が錯綜して整理がつかず，「紛糾を惹起」したことによるものであったという事実が示すように，北満とはいえハルピン近郊にはいわゆる「無主の大地」などというものはなかった[21]。事変後の日本人入植地に対する現地住民（いわゆる「匪賊」）による武力攻撃の根底には，こうした無謀な用地買収があったのである。

6．「天理村」用地の決定

関東軍よりの突然の中止命令で頓挫した移民村の用地買収計画であったが，現地の天理農村建設事務所主任の橋本正治は早くも7月19日には「次ノ移民候補地トシテ呼蘭河松花江合流地点，東北連合航務局長英順氏ノ持地ヲ踏査スル為各方面ニ手配ヲナス」と『天理教青年会満州移民事業日譜』第1巻（24頁，橋本正治編・私家版・天理図書館所蔵）に記しているように，移民候補地選考への動きを始めている。内地における落胆とは逆に，以後の橋本は精力的に候補地物色を各方面に依頼する様子が『日譜』に記述されている。もっとも「呼蘭河松花江合流地点」については，22日付記述の中に「距離遠ク匪賊ノ巣窟ナル上，常時汎(ママ)濫ノオソレアルヲ以テ断念ス」（25頁）とあるが，その後も各方面に働きかけを続けている。

橋本主任は7月28日に，事の顛末を報告するために「おぢば」に帰り，31日の青年会本部での常務委員会に出席しているが，8月4日にハルピンに戻ると，「再ビ移民計画案ノ樹立ニ着手ス」（27頁）とメモしている。この時期は青年会長である二代真柱は北米巡教中であり，『天理村十年史』の記述によれば，「ともかく九月の帰国されるのを待って重ねて協議，管長様（二代真柱のこと＝引用者注）の指示を仰ぐことにしてひとまづ結末とした」（58頁）という状況であった。おそらく，移民事業に関する直接の責任者であった深谷満州伝道庁長（青年会常務委員兼務）が，二代真柱の意を汲みながら連絡を取り合って，次なる候補地選定の活動を継続したのであろう[22]。以下，深谷の指揮の下で現場の天理村建設事務所主任であった橋本のまとめた『日譜』を基に，その活動の様子をみてみよう。

とりわけ目につくのは軍関係との折衝である。先の移民入植地の選定に際しては関東軍の意向とは関わりなく事を進めた結果，軍の都合で突然の中止命令が下され，移民村建設の出鼻をくじかれたが，その二の舞だけは避けたいという思いからであったに違いない。また，それが当時の状況からすれば，もっとも手堅い手法であったことも容易に想像できる。皮肉なことに，機会は関東軍移民部の方から持ちかけられたのである。

橋本の『日譜』を読んでいると9月7日の記事に「関東軍移民部山田金五氏来哈。橋本ニ対シ，移民事業再願方慫慂セラルヽ所アリ。関東軍ヘ提出スベキ再願案ヲ同氏ト共ニ作製ス」（29頁）とある。その後25日にも移民部の山田氏が再訪して打合せをしている。更に30日には「来哈中ノ拓務省書記官小川正儀氏ヨリ橋本ニ対シ勧業花井専務ノ意見ニヨル軍ノ阿什河両岸買収地ノ一部ヲ譲渡受クルヤウ手続方慫慂セラル」（31頁）ともある。こうした関東軍移民部や拓務省の人びとの意見を受けてか，10月3日には「橋本，阿什河右岸一帯，軍買収予定地ノ実地踏査ニ招カレ共ニ踏査ス。一行軍移民部鎌田生三氏，同嘱託永

田稠氏以下三名，勧業花井専務以下五名，警備日本軍十一名」（同頁）とあるように，軍移民部による現地視察に招かれている。そして翌4日には「橋本，永田鎌田両氏トハルビン発新京行車中軍買収地ノ一部ヲ譲リ受クル件ニ付打合ス」（同頁）とある。同夜は「国都ホテルニ於テ山田金五氏ト右案ニヨル出願書類ヲ起草ス」（同頁）と記されているように，関東軍移民部の畳み掛けるような強い働きかけが天理農村建設事務所主任の橋本になされていることがわかる。結果的には，この時視察した阿什河右岸の一部が満州「天理村」となるのであるが，[23] この時の軍買収予定地こそ先に紹介した「満鉄融資土地買収施行方法ニ関スル件」で「一町歩一円内外」の価格で購入すると決定された土地に他ならない。だが，そのことは深谷や橋本はじめ教団関係者の知る所でないこともまた事実であった。橋本が先の阿什河左岸の土地購入失敗の顛末を記した備忘録の一つに「阿什河畔土地問題ニ就イテ得タル経験並ニ今後ニ対スル意見」というものがあるが，その中に「土地買収ニ対スル認識不足ニ就イテ」というメモがある。そこで彼は「軍ノ力ヲ以テスレバ地価ヲタヽキ得ルトハ一般内地人ノ考フル所ナルモ実際ハ全然然ラズ。軍及ビ官ノ援助ニ依ル買収ハ不当価格ニヨル取引ヲ防止スルニ役立ツモノニシテ，決シテ百ノ価値アルモノヲ其壱割位ニテ購ヒ得ルヤウニナルモノニアラズ」と記している。[24] おそらく，これは当時の軍側の言い分だったのだろうが，橋本はそれを真っ正直に信じていたことがわかる。

しかし，この関東軍移民部からの慫慂は，失意のどん底に突き落とされた感のある満州「天理村」建設に携わる人びとにとっては，一筋の光明に見えたであろうことは想像に難くない。10月7日には深谷満州伝道庁長は折から来満中の山澤常務委員と共に「新京駅ニ梅谷移民部長ニ会ヒ，更ニ軍司令部ニ於テ拓務省小河書記官ト会シ，移民計画再願ニ関スル打合ヲ」（32頁）行っている。二日後の9日には橋本が「北満ホテルニ梅谷移民部長ヲ訪ヒ移民計画再願ニ関シ打合ヲ」（32頁）している。こうした軍関係者等との折衝を重ねた上で，深谷庁長と橋本主任の二人は「おぢば」に帰り，15日からの一連の常務委員会に出席している。

橋本の『日譜・参考資料』第1巻に収録されたメモによれば，17日に行われた2回目の常務委員会では「山澤より満州に於ける各方面実地訪問の結果を報告あり。次いで移民問題に関する根本的協議を遂げ，愈々計画を新たにして再び満州移民を決行する事を決定す」（237頁）とあるように，満州「天理村」建設は青年会の移民事業として正式に機関決定された。そして，10月27日に第15回の青年会総会が開かれ，満州移民事業は承認されたのであるが，その翌日，青年会長が出席する移民再願に関する常務委員会が持たれ，その席に白石三郎，森権臣（健臣の誤記か）の二人が出席している。橋本のメモには「関東軍司令官菱刈大将の側近者としての白石三郎及び新京大使館森権臣博士の帰和を幸ひ移民計画再願の際なるを以て其腹蔵無き意見を聴取せり」（239頁）とある。この二人が具体的にどのような人物であるのか，また二人が関東軍より派遣されて来たのか天理教側の招きに応じて来たのかは不明だが，この度は関東軍が一定の力を入れてきていることは窺い知ることができるであろう。[25]

こうした準備を経て，11月11日付「哈爾濱近郊移民計画ニ関スル件御願」が天理教青年会長中山正善から関東軍参謀長小磯国昭宛に提出された。橋本の『日譜』によれば，この

願書は16日に関東軍特務部へ提出されている。そして，翌９年１月16日に関東軍参謀長より「昨年十一月十一日付申請ニ係ル哈爾濱近郊移民計画ニ伴フ一千町歩ノ土地商租ニ付テハ左記条件ヲ付シ手続方異存無之」として許可が下りた。これに勇み立った関係者は以後，精力的に軍および東亜勧業株式会社と折衝し，東亜勧業が買収した阿什河右岸の内の約1,200町歩を12万円で購入した[26]。１町歩当たり100円という購入価格であった。だが，その地域が「一町歩一円内外」の価格で軍の威圧によって東亜勧業が買収した土地であってみれば，強権的に追放された現地の人びとの土地奪還の武力闘争の標的になることは当然の結果でもあった。『天理村十年史』では「特にこの松花江流域は匪賊の巣窟といはれてゐたので甚だしかった。天理村も哈爾濱から僅か四里の所であるが，阿什河に沿ふてしきりに匪賊が蠢動してゐた。部落建設に完全な武装がほどこされた所以である」（100頁）と述べているが，その背景には関東軍によるこうした強引な土地の収奪があったことも一つの要因だったといえるのではないだろうか。いずれにせよ，軍の強力な支援を受けて満州「天理村」の用地は確保されたのである。

７．移民団の入植

ともあれ移民村の用地は確保された。軍の指示に従いながら，東亜勧業株式会社との間で綿密な打合せが頻繁に行われた結果，昭和９年（1934年）５月26日には関東軍特務機関や東亜勧業関係者を来賓に迎え，満州国内の教会長，信者たち関係者多数が見守る中で，満州「天理村」の地鎮祭と起工式が挙行されている。

一方，日本国内では，「天理村建設計画概案」を『みちのとも』（４月20日号）に掲載して，青年会を軸に全国の教会では具体的な移民の募集活動が急ピッチで進められていた。移住者募集の第一の特色は「移住者が宗教的信念によって固く団結していること」と謳われているように，北満州に一つの伝道拠点をつくることを目的として入植者の募集と選考が進められた。その結果，43家族が満州「天理村」の第１回入植者に決まった。募集活動は全国的に展開されたとはいえ，この年の東北地方は大凶作に見舞われ，いわゆる「娘売ります」というチラシで知られるように[27]，東北農村家庭の崩壊が深刻な社会問題となっていた状況を反映してか，移住者43家族のうち東北・北海道出身が27家族（63%）を占めていた。

ともあれ，わずか数ヶ月の間に43家族204名の移住者を選考し，同年10月27日の青年会総会までに移民団を組織することができた。この時の移住者選考では，「布教専任者を入れること，村の構成に必要な小学校の先生，大工，左官，鍛冶屋，蹄鉄工等の特殊技能者を組み入れることも配慮された」と『青年会史』は述べている[28]。さらに，募集の第一番目の特色として記したように，天理教の信仰を中心とした移民村づくりを具体的に実現するべく神殿を村の中央に配置し，併せて小学校や診療所を建設している。診療所には開村当初から医師が勤務しており[29]，その診療活動は小学校の教育と共に周辺の現地人にも提供されていた。

これは屯田兵開拓方式を採用していた試験移民期の当時にあっては，画期的な移民村の構想であり，かつ地域交流の発想と実践も刮目に値するものである。こうした現地に根づこうとする自覚と決意が，第１回移民団の出発に際し団長として43家族を引率した深谷徳郎満州伝道庁長（天理村建設事務所長兼任）

をして「従来の満州移民殆んど総てが成功せず，あらゆる条件からこの“天理村が失敗すれば日本の満州移民は絶望だ”とまでいはれているのだから，国策の上から見てもわれらに課された努めは重いものである」と言わしめているのであろう。[30] このような高揚感は官民あげて満州移民を提唱しているさなかにあってはごく自然な感情の発露であったと思われる。翌10年９月には第２回の移民団（20家族116名）の入植をえて，ハルピン郊外阿什河右岸の一角に300名を超える日本人の民間移民村が出現したのである。

「天理村」は計画当初より蔬菜中心の営農活動を目指していたことから，北満一の消費都市ハルピンへの農産物輸送の便を考慮して，昭和11年６月に天理村軽便鉄道を敷設しはじめた。この計画は現地で立てられたもので，資金の調達も現地で行うものであったために困難を伴ったが，実際の工事には関東軍の協力もえて，村からハルピンまで16キロの軽便鉄道が完成し，翌年の12月には営業運転を始めている。それまでは荷馬車で丸一日を要していたハルピンへわずか30～40分で大量の物資輸送が可能となり，「天理村」，の活動はしだいに軌道に乗り出した。じっさい，「天理村」建設のための借り入れ資金の返済等の村経営の収支を別として，純粋に営農収支を見ると，昭和11年度（1936年）の営農収益は29,861円72銭，翌12年度は50,952円53銭であったのに対して，軽便鉄道がフル稼動した13年度は104,251円88銭と一桁上がりの収益をあげており，営農上の差引利益は31,561円64銭となっている。[31]

もっとも，この軽便鉄道の建設資金の借り入れは村の経営に重石となり，後にその負債を教会本部に肩代わりしてもらうべく，昭和13年（1938年）10月に「天理村」の経営は青年会から教会本部へと移管されている。青年会はまさに「あらきとうりょう」[32]としての使命をここに終えたのである。以後は，山田清治郎本部員を新たに村長として迎え，教会本部が直接の責任者となって村の運営が進められた。

こうした紆余曲折はあったものの，その後，村の経営は順調に進み，翌昭和14年４月に出版された宇田尚の『対支文化工作草案』（改造社）において「宗教工作における天理教の重要性」という１節を設けて紹介されているが，そこでは「北満の天理移民部落はその精神的統一において，生活の規律において，従って全体としての健全なる発達において最も優れたる移民村である」と高く評価されている。[33]「天理村」は天理教内部の関心を集めるだけではなく，関東軍移民部やその周辺の諸団体からも注目されるようになり，短期間のうちに多くの関係者が視察に来るまでに成長していった。

８．満州人への布教

２回の移民団の入植で村の体制が一通り整うと，深谷の「新満州国の瞥見」でも述べられていた「開拓事業を盛にして，それより収穫したる果実を以って伝道費に充当する」という満州布教の計画は早くも実行に移されている。というよりも，深谷をはじめ青年会や教団関係の人びとにしてみれば,そもそも「天理村」の建設を考えたのは満州布教に資するためであったのだから，当然のことといえば言えるであろう。その深谷が昭和11年１月10日に「天理村」建設事務所長を辞任するのと時を併せるかのように布教師が村から巣立っていった。『天理村十年史』は，「それは入植間もない頃，恐らく営農に，経営に，村では一人でも多くの働き手を要したであろう。そ

れを敢然と排して，日満融和の礎石たらしむべく，満人布教に乗り出さしめたのである」と，その間の状況を簡潔に述べている。[34]

最初に布教に出たのは新田石太郎で，同年１月末のことであった。橋本村長[35]から付近の「満人部落」へ布教に出るように要請された新田は「言葉も判らず，ひとりで満人部落へ入って布教するのですから危険は免れませんでした。然し私は神様と『骨だけは必ず拾ってやる』と仰有った橋本村長さんの親心を信じて，その日限り村の仕事を終へ，翌日から毎日お救けに出ました」と後に述懐している。[36]

新田に続いて田中勝美，日吉菊蔵，藤田秀正，藤田すゑ，佐々木末治といった人びとが布教に出て，その活動はそれぞれ教会や布教所を設けるまでに実を結んでいる。『天理村十年史』が編纂された昭和18年（1943年）９月の時点では，日本人信徒759人（別に教師・教徒が215人いる）に対し，満系信徒は2,497人と記録されていることからも，[37]これら布教師たちの布教がいかに現地人の社会に根づく情熱的なものであったかが分かる。そのことは先に紹介した新田の回想記の締めくくりに「つまらぬ私が五年の間たゞ満人を友として心で語り合ひ救け合って来たことは決して無駄ではなかった。満人を育て導き動かす力は，たゞ明け暮れ彼等と語り，食べ，働き，寝ることであるといふことを深く感じました。満人の食物を喰べ，満人のやうな暮をして，やっと満人のやうな顔つきになって来た私は，今初めて満人になり切ってこの人達を育てる自信と望みを持つやうになったのでした」と記述されているが，[38]ここには満州の異民族に対する優越感もなければ蔑視もない。まさに文字通り満州の人びとの中に溶け込もうという熱意があるのみである。そこには，教祖の教えられた「いちれつきょうだい」の具体的な信仰実践が一つの新しい共同体を出現させる可能性を胚胎していたかも知れない。その意味では，「天理村」を拠点とする満州布教は成功しているといえるだろう。

だが，信仰を核とする新しい共同体の可能性はついに実現することができなかった。時局がそれをゆるさなかったのである。そう言ってしまえばそれまでなのだが，そこにはもう少し検証すべきことがあるように思われる。結論から言えば，満州「天理村」が軍や国家の協力をえて進められた移民事業であったということは，裏を返せば，軍や国家の要請に従わなければならない宿命を出発の時点から背負っていた，ということである。

９．戦時体制と満州「天理村」

昭和12年（1937年）７月に北京郊外の盧溝橋で生じた日中両軍の軍事衝突は政府の不拡大方針にもかかわらず，戦闘は中国各地に飛び火し，８月の国民政府に対する膺懲（ようちょう）声明以後，ついには日中の全面戦争へと突入していった。日本軍の兵站は急速に広がり，大量の補充物資が必要とされるようになってくると，満州は一つの兵站拠点として，特に石炭と食糧の補給基地としての重要性が改めてクローズアップされてきた。[39]そうした中で，翌年の４月には国家総動員法が施行され，それまでの非常時から，日本は名実共に戦時体制へと移行した。

こうした状況が満州移民の方針に決定的な変化をもたらしたことは言うまでもない。じっさい，昭和12年までの満州への日本人開拓移民の数は数千人規模（12年は7,788人）であったが，13年は一気に30,196人へと飛躍的に増加し，以後，なかには分村運動という形態さえとりながら数万人規模で推移している。

そして，敗戦の年の昭和20年（1945年）でさえも13,545人が開拓移民として満州へ渡っている。[40]それほど食糧増産は喫緊の課題だったのである。

ところで，日中戦争（当時の呼称では支那事変）は政府や陸軍内部でも，首都の南京を落とせば国民政府も降伏すると読んでいたようだが，[41]抵抗を続ける中国軍を追う形で，戦線は大陸の沿岸部から次第に内陸部へと，いわば線から面へと拡大してゆき，ついには泥沼の膠着状態に陥ってしまった。日中戦争に突入直後，時の文部大臣は所管する総ての宗教団体の代表者に挙国一致運動を要請したが，戦争終結への打開策の見えないまま時間が経過するにつれて，軍と結びついた各省の革新官僚を中心とする勢力に押された文部省宗教局は，しだいに国民精神総動員に向けた要求を各教団に要請してくるようになりだした。

各教団ともそうした要求に応えることにそれぞれ腐心しているが，[42]天理教でも総務部長名で昭和13年10月に全国の教会長に宛て「朝夕参拝祝詞後文」を通達している。その中で「天皇（すめらみこと）の大命（おほみこと）のまに〳〵敵（あだ）なす支那の国を打ち罰（きた）め」と唱えるように指示している。[43]地方の教会では「いちれつきょうだい」の教祖の教えとの整合性に首をひねる者もいたといわれている。[44]だが，政府の要求はしだいにエスカレートしてゆき，具体的な行動で総動員体制への協力を求めるようになってきた。とりわけ，天理教は皇国史観とは根本的に異なる創世説話すなわち「元初（もとはじま）りの話」（当時は一般的に「泥海古記」と呼ばれていた）をもつがゆえに，天皇制イデオロギーを核に挙国一致をもくろむ当局からは猜疑の対象になりやすく，キリスト教とともに，特高の執拗なマークの対象にあげられていた。そうした状況下で，二代真柱は同年12月には『諭達第八号』を出し，その中で「泥海古記に関連ある一切の教説は之を行はず」と教内全体に通達せざるをえなくなったばかりではなく，総力戦遂行の国策に積極的に協力することを「本教が　皇国に負へる大使命に鑑み，国家新事態に即応して国策指導の大精神に帰一せんとするにあり」と宣言し，そのための具体策を企画実施するため教内刷新の革新委員会を発足させた。[45]

日中戦争はしだいに周辺の欧米諸国の勢力圏を刺激する形で紛争に巻き込み始め，ついに昭和16年（1941年）12月には，英米に対する宣戦布告という事態にまで進展していった。緒戦の華々しい勝利の余韻も１年後にはすっかり消え，人びとは窮乏の生活を余儀なくされるようになった。開戦１周年を間近に控えた昭和17年11月26日，政府は各宗派の管長および教団統理者を皇居に招き，天皇に謁見した後，文部大臣官邸で協議会を催した。天皇がその場でどのような言葉を下されたのかは不明であるが，その後，多くの教団において「聖旨奉答」を合言葉に総力戦に即応する活動が展開されている。なかには戦時教学を強調して活動する教団もあった。天理教でも，11月27日付で『諭達第十三号』を発布し，そのなかで「一意宗教報国の使命に挺身し，以て洪大無辺の聖恩に応え奉らん」と戦争遂行を全教信者に訴えかけている。[46]つまり，教団は国家の総力戦体制に組織として組み込まれてしまったのである。じじつ，天理教としての聖旨奉答の具体的な活動目標として，一つは百万人の「ひのきしん」動員による全国の炭鉱での勤労奉仕活動，いま一つは，満州「天理村」へ600戸の農業移民を送り出す３箇年計画が掲げられた。この目標にしたがって，翌18年の１月５日付で天理村移民推進委員会を立ち上げて，募集活動を推進することとな

り，早くも１月10日付の『天理時報』で「食糧増産の大国策に即応し第二第三の開拓団を建設せんと準備を進めつゝありし所，愈々機熟し，日満両国政府の絶大なる支援と補助を得，大天理村の建設に邁進せん」として移民の募集広告を掲載している。[47]

ここに，満州「天理村」は満州布教の拠点づくりという性格から，総力戦体制の一環として食糧増産の国策に応えるということにレゾン・デートルを一変してしまった。

10. 戦争末期の移民募集活動

その頃の天理教の各教会では働き手の多くを徴兵や徴用に取られ，教会活動は老人や留守番の女性たちによって支えられていた。[48]教会に所属する信者の家庭でも状況は同じであったに違いない。こうした状況下で，毎年200戸の移民を満州に送り出す募集活動は困難を極めたことは容易に想像できる。それを踏まえてか，天理村移民推進委員会副委員長の諸井慶五郎は，第11回教義講習会の席上で，「本教においても教師教信徒を他に転出せしむるほど人があり余っているといふのではない，その実情は全く国と同様でありますが，遊閑的余力をもってしては大事の必成を期することは出来ません。ならん中から何でもといふ必死の真実にのみ神様の御守護があり，大事必成の鍵が秘められているといふ事は，教祖様が親しく身をもって残されたおひながたではありませんか」と受講した教会長たちに檄を飛ばしている。[49]

この600戸送出計画に基づいて全教団的な募集活動が実施された結果，計画の発表から２ヶ月後の３月12日には第３次移民先遣隊として66名の移民を送り出し，大天理村構想の下，本隊を迎えるべく新しい移民村の建設に取りかかった。次いで，９月には本隊の一部41家族165名が入村し，さらに翌19年の２月と３月に先遣隊の家族呼び寄せも含めて137家族540名が満州「天理村」へ入村し，昭和18年度の送出を完了している。[50]１年で700人を超える移民を受け入れた天理村は宿舎や耕作地の準備に大忙しであるが，その様子を『天理時報』（昭和18年10月３日付）は「到着した本隊は，家屋の心配なしに新しい家（但満人家屋の改造したもの）に入ることができた。（略）開拓団といへば全然耕作された土地なく開墾を考へる人が大多数であらうが，この付近開拓団は何れも満人が既に開拓した土地をその侭すっきり受継いで更に加えて荒蕪地を開墾する」と伝えている。

じっさい，新しい入植地の区域には，小規模経営ではあれ約１万人の現地農民が耕作をしていた。[51]それらの人びとの立ち退き交渉がどのように進められたのかは不明であるが，先住の人びとにとって，第３次の入植者たちは突然の闖入者であると受けとめられた可能性は否定できないだろう。しかも，追加の入植者はこれだけでは終わらなかった。

昭和18年初頭にはニューギニアやガダルカナル島で壊滅的な敗北を重ねた軍部は，それでも南太平洋各地からの撤退を「転進」と呼び，戦意高揚を叫び続けた。だが，増え続ける戦死の公報が人びとの身近にまでおよぶ19年の半ばごろには，さすがに日本がアメリカに勝つと本気で思う大人は少なく，筆者の母（当時27歳）も，内心では一刻も早く戦争が終わり，出征していた夫が生きて帰ることをひたすら神様に祈っていた，と後に述懐している。日本に勝ち目がないと思う者は教団首脳部の中にもいた。しかも戦争の早い段階で。たとえば，12月８日の対英米宣戦布告の日の校長訓示の思い出を，天理中等学校の生徒であった久保寿一は「私の在学当時の校長は柏

原義則先生であった。昭和16年12月８日，日本が米英に対して宣戦布告をした日，授業前の校長訓示で，日本は本日戦争に突入したが，今の現状であれば日本は敗戦となるだろう。何故ならば米英と日本では実力の差がありすぎる。その上に制空権を米英が取得するならば日本がどんなことをしても負けるだろう，と話された。当時軍国主義最たる中で，私は，憲兵が校長を連行するのではないかと思った。校長は，戦争に勝たなければならないとは一言も言わず，ただ，信仰者として教祖に喜んでもらえる人間になることを望む，と結んだ」と同窓会の会報に回想を寄せている。[52] そして，柏原校長の予見どおり昭和19年の後半には，日本は本土上空の制空権をも失い，本土はB29の爆撃に曝されるようになった。

日本の敗色が次第に濃くなる中でも，教団は５月と８月に計146名の開拓移民を送り出している。さらに，年度末の翌20年３月には９日と21日，24日の３回にわたり104家族453名の移民を満州「天理村」へ送り出したが，その現状を『天理時報』（昭和20年４月８日付）は「聖旨奉答活動として本教では昭和十八年天理村に開拓移民六百戸の送出を計画しすでに十八，十九年度四百戸の送出は大東亜省の絶大な支援と教信徒の蹶起により本年三月までに送出を完了したのであったが，昭和二十年度の送出戸数たる爾余の二百戸については本年度はその編成を新たにしてこれが実現を図り食糧増産に貢献せしむべく興亜部の手によって計画をすゝめている」と報じている。

昭和20年（1945年）３月に入ると，９日に東京，13日に名古屋，14日に大阪，17日に神戸がそれぞれ大空襲に見舞われ，数百万人を越える罹災者を出している。もはや誰の目にも日本の敗北は必至と感じられるなか，４月26日に，教団は20家族70名の満州開拓移民を送り出した。そして，その後も募集推進活動は各地区ごとに行われているが，その委員の一人である山田清治郎（近畿地区担当）は「６月９日　午前７時51分田辺発，○○氏同伴和歌山に向う。警戒警報発令あり，間もなく空襲警報発令さる。稲原付近にて敵機来襲に備へ座席を上げ待避状態となる。由良付近にて警報解除さる。然しながら由良より軍隊輸送の為め退席さゝれ，東和歌山迄立往生となる。午前11時東和歌山着，下車教区着（略）午後４時半より集合されし主事諸君へ天理村移民推進の件に就き約１時間半いろいろ懇談す」と日記に記している。[53]

これは，ほとんど命がけの募集活動である。他の委員の推進活動も多かれ少なかれ同様の状況下で移民の募集に奔走していたであろう。まさに，委員を始め関係者たちが「ならん中から何でもといふ必死の真実」の心で取り組んだからこそ，その結果として，８月下旬に満州に渡るべく52家族200名余もの移民が集まったのである。なかでも，都市部の空襲による罹災者が心機一転大陸へ渡るべく応募している様を，『天理時報』（昭和20年６月24日付）では「戦災者も交り新生を大陸へ」という見出しで「当局でも罹災者の集団帰農を慫慂してゐるごとく都市在住のもので戦災によって新生の決意を固めさせたことなどによりこれに参加せんとする気運が積極化しており」と伝えている。もっとも，この時の移民団は都介野の訓練所で８月15日を迎えており，満州に渡ることはなかった。

満州「天理村」に入植した人びとのその後は，他の多くの満州移民の人びとが避難民となって辿ったのとほぼ同じ運命を歩まざるをえなかった。青壮年の男のほとんどはいわゆる根こそぎ動員にあい，老人と女性と子ども

たちが幾多の苦難を乗り越えて「おぢば」へと引き揚げて来ている。その状況は，昭和21年10月27日付の『天理時報』によれば「さる八月二五日住みなれた村を出発，同日ハルピン着，九月十三日ハルピン発同十六日新京着，新京在住の教信徒の接待をうけ二四日新京発，奉天一泊の後二七日錦州着，十月十三日胡蘆島発乗船，十六日博多入港二一日上陸」という旅程で帰国した。その一行千余名は二三，二四の両日に相次いで「おぢば」に到着した。

満州「天理村」はこうして終焉を迎えた。現地人信者が約2,500人もいたといわれているが，その人びとの消息は不明である。ただ，旧村民の一人によっていわゆる残留孤児の調査が続けられ，今日までに十数名の消息が判明しているが，現地人の信者たちにまで調査は及んでいない。(54)

11. 結びにかえて

「歴史を学ぶことは過去との対話である」とはよく言われる。なかでも，失敗の歴史のなかにこそ，学ぶべきものは多くあるのではないだろうか。まさに，鶴見俊輔が「まちがいのなかに含まれている真実のほうが，真実のなかに含まれている真実よりわれわれにとって大切だと考える」とし，その理由を「私たちがまちがいを通して得ることのできた真理への方向性の感覚ということになりますが，それこそ私たちにとって実際に役に立つ真実の核心をなすものである」(55)といっている。そして，そこに歴史を学ぶ意義があると筆者も考える。

こうした視点から今日，満州「天理村」の歴史をふり返るとき，次の二つのことを思わずにはおれない。一つは，純粋な信仰が現実の社会の出来事と交わるとき，安易に接点を求めてはならないということ。それが本当に親神様や教祖の思いに応えるものであるのか否かをじっくりと思案しなければならない。

深谷徳郎の個人的な信仰信念としては，まず満州に天理教の集団開拓村をつくり，そこを拠点に満州の人びとへの布教を考えていたことは疑いのない真実であっただろう。そして，それは同時に中山正善二代真柱（青年会長兼務）の思いでもあったと思われる。このことは，昭和16年（1941年）１月に深谷が出直（死去）した時，教団葬を主宰した二代真柱は，人びとの追悼のなかに「今日計らずも移民，満州伝道庁につきて語るを聞かず。深谷の病床につきしは，満州なるを思ふ時，あれこれ特に感慨無量なり」(56)という感懐を書き留めていることからも推し量ることができるであろう。

二人の伝道的信念が満州「天理村」の実現を可能にしたのであるが，問題は，関東軍の力を背景に日本が実効支配する満州国のあり方をどれぐらい冷静に把握していたか否かということである。当時の新聞各紙は満州諸都市への軍事侵攻において日本軍が連戦連勝し，支配地を拡大した結果，満州国という新しい国家が誕生する状況を報道することによって販売部数の増加を競い合い，結果的に国民の戦意を煽り，いわゆる十五年戦争への道を用意した。(57)だが，そのような湧き立つ世情の中でも冷静に事態を見つめる一群の人びとがいたことも事実である。先に見た，土屋文明もその一人だった。ましてや，世俗の権力を絶対視することなく，自らの信仰する理想の世界像に照らして現実を相対化すべき宗教者が，世俗の権力や情報を基準として行動することの危うさを満州「天理村」の歴史は私たちに教えているのではないだろうか。

この点に関して，中山正善二代真柱は晩年に「その頃の私は青年会長であったのであり

ますが，今日にして思います時に，私のその決心は，時を得たことであったとは思いますが，一つ足りなかったものを感じるのであります。それは何であったか，自分の成人ということを棚に上げて，忘れたように，ただ時が来たが故に，向うへ渡りたいという若人の血気にはやった感じをするのであります。先程申しましたように，あらきとうりょうの文字から来るところのゆえんは，いわゆる海を渡ってにをいがけを，世界の隅々へ流すことであります。しかしながら，そのことのためにはまず，生れたままの荒木，生れたままの人間心に浸ったところのその心，これをもう一度，教理によって練り直してみることが肝心であったということを，さんげ致したいのであります」と率直に告白している。[58] 二代真柱が戦後，公権力の行使と不可分な政治に対して一定の距離を置くいわゆる政教分離の姿勢を貫いた理由をここに見ることができる。以って銘すべしである。

いま一つは，「すなお」や「ひたすら」という宗教における実践的な徳目は容易に無批判の心情へと吸収される契機をもっていることを自覚しなければならない，ということである。信仰的な使命感は冷静に周囲の状況を見つめながら実行へと移すのでなければ，逆に周囲の状勢に足元を掬い取られかねない。これは，先に言ったことと一見すれば矛盾するように思われるかもしれないが，絶対の使命感はそれだけ注意深く状況を見つめる必要があるということである。敵機の機銃掃射に備えながら移民募集に奔走した人びとの使命感は純粋ではあるが，どこか奇妙に映るのはそのためであろう。軍の援助で土地を購入するのは不当価格の防止であるということに一点の疑いももたない素直さは，純真な心の持主である証明ではあっても，賢明な見識の持主であることの証明にはならない。また，いくら不況下であれ，「一坪三厘乃至二銭」という土地の価格など，少し冷静に考えてみれば不当な価格であることぐらい見当がつく。一銭五厘で人間の生死を左右する召集令状いわゆる赤紙は当時の人びとからも不当な非人間性の象徴と意識されていたのである。しかし，「すなお」や「ひたすら」の精神に貫かれた人びとは，大方の大人たちが常識的に日本の敗戦を感じているなかでも，どこまでも誠実に戦争遂行の国策に協力してやまない事態を生み出す。その結果，昭和20年の4月26日に送り出された移民団の人びとは，「天理村」に落ち着く間もなく避難民の列に加わらざるをえなかったのである。けだし信仰共同体における「合成の誤謬」とでも呼ぶべき現象であろうか。

だが，「すなお」や「ひたすら」の実践が世俗の価値観を見つめ返すことができる例もある。しかし，それは権力の方向に添って発揮される時ではなく，その逆の場合であることは教祖の「ひながた」（宗教的生涯）が教えるところである。

敗戦後の混乱期の満州にあって，人びとが自分の身を守ることに汲々としていたさなかに，ただ「ひたすら」避難民の世話取りに当たった一群の天理教の信者たちがいた。その思い出をジャーナリストの藤原作弥は『満州，小国民の戦記』で感動的に描いている。敗戦後の混乱する満州の安東で自主的なボランティア・グループの中心人物の一人だった市公署総務課長の黒田正七郎さんが「難民や孤児の救済，病人や浮浪者の救済をした団体は，僕たちの他にもあったが，最も献身的な活動をしたのは天理教会だった」，「私は市公署総務課長という職歴上，表だった行動はできませんでしたが，難民活動対策の蔭の仕掛け人

でしたから実情をよく知っています。どんな宗教，団体，神社仏閣よりも天理教会は熱心で，わが身をかえりみず多大の犠牲を払いました。安東の天理教会はクエーカー教徒のような固い信念と情熱と奉仕の精神を持っていましたね」と述懐していることを紹介し，著者も「その天理教会は奉仕活動が国民党ゲリラに内通する政治活動と誤解されて，信者十数人が銃殺刑に処されたという。そういえば，父や黒田さんのグループで熱心に働いた東田嬢一家も天理教徒だった」と回想している。[59] このエピソードは天理教満州布教の最後の光芒であり，それは今でも私たちにとって，一つの信仰の指針たりうる。

注

（1） 鶴見祐輔『正伝・後藤新平』第4巻，42頁，藤原書店，2005年

（2） 小林英夫編著『満州―その今日的意味』15–20頁，つげ書房新社，2008年。もっとも，1933年版の『満州経済年報』によれば，1931年末の満州の総人口は3,920万人で，内日本人は83万8千人となっている（満鉄経済調査会編『1933年版・満州経済年報』424頁，改造社，1933年）。この日本人の約3分の2は当時日本の領土とされた朝鮮半島出身の人びとと推計されるので，小林のいう約20万の日本人とはいわゆる「内地戸籍」の人のことかと思われる。

（3） 島田俊彦『関東軍』107頁以下，講談社学術文庫，2005年。

（4） 関東軍司令部から朝鮮軍司令部への増援依頼の電報に「在奉天城我が軍は全力を挙げて交戦中にして苦戦の状況なり」とある（臼井勝美『満州事変』43頁，中公新書，1974年）。つまり，石原は満州事変の勃発当初から兵力の不足を認識していたゆえに，事を始めた以上，一気に既成事実を積み重ねて陸軍中央や政府に追認させ，兵員の増派を迫る作戦行動をとらざるをえなかった。

（5） 浅田喬二「満州農業移民政策の立案過程」6頁以降（満州移民史研究会編『日本帝国主義下の満州移民』所収），龍渓書舎，1984年。殊に東支鉄道以北の北満州地方には屯田兵制移民を当初は考えていたという（10頁）。

（6） 石射猪太郎『外交官の一生』219頁，中公文庫，1986年。

（7） 深谷の報告「新満州国の瞥見」には直接関東軍司令部を訪問したということは書かれていない。だが，旅順や長春を含む各地に赴き，駐剳隊や憲兵隊，領事館，警察署等を訪問したと述べていることからすれば，なんらかの形で関東軍司令部と接触した可能性は否定できない。

（8） 浅田喬二，前掲論文，8–9頁。この時作成された基本方策は稲作水田を主とする集団農業移民を根幹とするものであると同時に，屯田兵移民ではない普通移民といえども軽機関銃と小銃で武装した「国防移民」であることが定められた。

（9） 奉天市西六條街12号に開設された布教管理所の敷地は満鉄から無料貸与された土地であるが，その経緯については不明である。また，満鉄がなぜ多くの布教師に半賃優待券を与えていたのか，天理教以外の布教師にも同様の処遇がなされていたのか，等々については今後の課題としたい。

(10) 6箇所の教会のすべてが満州にあったのではない。上海宣教所は満州外であるが，次に紹介する村田慶蔵の報告「北満を巡教して」の文中に「満州布教管理所は奉天に位置し，南大連旅順より，北哈爾賓浦塩を区内とし，上海青島の地を管理包括するものであります」との記載があることを見ると，当時の同管理所は教団の大陸布教の拠点であったと思われる。

(11) 『満鉄四十年史』(満鉄会編，吉川弘文堂，2007年）によると，1912年（大正元年）から1917年（大正6年）の間に満鉄の鉄道利益は784万円から2,359万円へと飛躍的な増加をみている。さらに，

大正期が終わった1927年（昭和２年）には6,805万円にまで成長していた（51頁）。つまり，15年間で利益は約8.6倍に肥大化したのである。

(12)　天野弘之・井村哲郎『満鉄調査部と中国農村調査―天野元之助中国研究回顧』20頁，不二出版，2008年。

(13)　浅田喬二『日本帝国主義下の民族革命運動』326−７頁，未来社，1973年。

(14)　満鉄経済調査会編『1934年版・満洲経済年報』434頁，改造社，1934年。

(15)　1927年（昭和２年）11月27日に，海外伝道規定が改正され，満州布教管理所が満州伝道庁と改称されると同時に，同管理所が管轄していた中国大陸布教は，この時新設された天津，上海の両伝道庁に移管された（『改訂・天理教事典』参照）。

(16)　江口圭一『昭和の歴史４・十五年戦争の開幕』176頁，小学館，1982年。原史料の篠原義政の『満州縦横記』は昭和７年12月に刊行されたが，即日発禁処分となる。

(17)　蘭信三『「満州移民」の歴史社会学』319−320頁，行路社，1994年。

(18)　30万円と仮定する根拠は，軍の中止命令直後の同年７月22日の青年会本部常務委員会で「青年会ハ国策ニ順応スルノ誠意ヲ披瀝スル為，金三十万円ヲ国営移民地購入費トシテ軍部ニ献納」する案が討議されたことに基づく（『天理村十年史』57頁）。

(19)　外務省外交史料館所蔵の「本邦移民関係雑件・満州国ノ部・天理農村関係」の一件史料に所収の公電。

(20)　この一件資料は日本力行会所蔵「永田稠文書」の内『満州移民参考資料第３巻』に所収されている。資料見聞にご協力くださった日本力行会の皆様に感謝いたします。

(21)　満蒙における土地所有制度については満鉄経済調査会編『1933年版・満州経済年報』に「蒙地は，その政治形態のみからみれば，蒙古王公を領主とする封建的土地ではあったが，然し，経済的構造に在っては，これは蒙古王公の領有地でもなければ，私有地でもなく，実に蒙古氏族の共有地であった」（６頁）と指摘されている。こうした実態認識の欠如が乱暴な土地買収を進め，その結果，土地奪還を標榜する氏族が連合体を組織するようになり，日本人入植地に対する武力闘争が各地で発生した。土竜山事件はその代表的な事例である。日本側はそれらを「匪賊」や「馬賊」と呼んで，武力での掃討作戦を展開することとなった。

(22)　二代真柱中山正善は，1941年（昭和16年）１月に深谷が亡くなった直後の教団広報紙『天理時報』（１月26日付）に「深谷をいたむ」という追悼の短歌を寄稿している。その前文に「深谷と共に語りて事の進めたるもの多し。とりわけ天理図書館，いちれつ会，天理村建設，満州伝道庁の新京移転，青年会等，他人の知らざる話し合ひあり。従って思ひ出も深きに，今日計らずも移民，満州伝道庁につきて語るを聞かず。深谷の病床につきしは，満州なるを思ふ時，あれこれ特に感慨無量なり」とある。移民村用地の買収頓挫後の候補地探しは「他人の知らざる話し合ひ」のひとつではなかったのだろうか。

(23)　劉含発「日本人満洲移民用地の獲得と現地中国人の強制移住」（『アジア経済』XLIV）47頁，アジア経済研究所，2003年。

(24)　橋本正治編『天理教青年会満州移民事業日譜・参考資料』第１巻，123−４頁。

(25)　当時，関東軍司令官は駐満州国大使を兼ねており，関東軍司令部と大使館とは一体であった。なお，森健臣は大正12年に関東庁翻訳官として昭和２年まで勤務。昭和７年，外務省に復職。戦後は中央大学や上智大学の法学部教授（国際法）を歴任している。白石三郎については不明。ただ，この二人の「おぢば」来訪については『みちのとも』にも『天理時報』にも該当する記事は管見の限り見当たらない。

(26)　『天理村十年史』83頁。

(27)　熊谷正夫「東北凶作地の娘を護れ！」204−8頁（『中央公論』12月号），1934年。この年の東北の窮状については『天理時報』（12月9日付）でも中山慶一が「売られた娘一村二百名を計ふ」と題して報告している。

(28)　『天理教青年会史』第4巻，117頁。

(29)　天理村診療所の川崎宗医師は，『天理村十年史』付録の関係職員録によれば，現地で採用された医師である。

(30)　『天理時報』1934年11月11日付。

(31)　『天理村十年史』177頁。ちなみに，39年度は89,800円56銭であり，40年度からは営農形態が変わり，同一基準での統計は抽出できないが，順調に村の経営は進んでいる。

(32)　荒木棟梁のこと。天理教では青年は荒野の開拓者に譬えられ，開拓伝道の先頭に立つものと期待されており，青年会または青年会員にこの呼称が用いられている。

(33)　宇田尚『対支文化工作草案』250頁，改造社，1939年。

(34)　『天理村十年史』311頁。

(35)　「天理村」で村長という呼称が何時から使用されたのか正確には分からないが，最も早いものとしては，昭和9年11月9日に最初の移民団が入植したが,その直後ともいうべき11月15日付で「在郷軍人会天理村分会新設願」が「天理村建設事務所主任　天理村長　橋本正治」名義で帝国在郷軍人会満州連合支部長宛に提出され，12月18日付で設立許可指令が天理村長橋本正治宛に届いていることからすると（『天理教青年会満州移民事業日譜・参考資料』第2巻，547頁および735頁参照），当初は対外的な必要に迫られて用いた呼称が，いつしか「天理村」関係者の間でも公に使用されるようになったものと思われる。

(36)　『みちのとも』昭和18年11月号。

(37)　『天理村十年史』311−2頁。

(38)　『みちのとも』昭和18年11月号。

(39)　山本有三『「満洲国」経済史研究』43頁参照，名古屋大学出版会，2003年。

(40)　蘭信三『「満州移民」の歴史社会学』47頁の表2−3参照。原史料は外務省移民局編『海外移住統計』（1964年）であるが，筆者は未見。

(41)　遠山茂樹他『昭和史』152頁，岩波新書，1993年。

(42)　たとえば，渡辺順一『金光教誕生物語―「人代」から「神代」へ，そのたたかいの歴史』（125−135頁，金光教大阪センター，2010年）には金光教の戦時体制への組み込まれ方が反省的に紹介されている。

(43)　『天理時報』昭和13年10月16日付。

(44)　『大森町大教会史』第2巻，675頁，天理教大森町大教会，1998年。

(45)　この間の経緯については東井三代次『あの日あの時・おぢばと私』上巻（養徳社，2000年）の第3章に詳しい。

(46)　『みちのとも』昭和18年1月号の巻頭に掲載。

(47)　委員会記事，募集広告の両者共に1月10日付の『天理時報』による。なお，委員会は中山為信委員長，諸井慶五郎・山田清治郎副委員長の他20名の委員で構成。

(48)　『大森町大教会史』第2巻，1249−50頁。

(49)　『みちのとも』昭和18年3月号，75頁。

(50)　『天理時報』や『みちのとも』では，満州へ送り出した数が出ているが，満州在住の一家が天理村に入村しているケースもあるので，昭和18年度までの入村者数は『天理村十年史』第4編「大天理村建設」の記録によった。

(51)　このことは諸井慶五郎の第11回教義講習会での講和の中でも「土着の満人も一万人余り居るには居るが，彼等は何れも貧弱な小作農であり，在来の旧式農法で僅かにその日暮しの域を脱しない」と述べている（『みちのとも』昭和18年3月号，75頁）。

(52)『養徳会報』第46号，34頁，天理高等学校内養徳会，2002年。
(53)『南海大教会史』第３巻，941頁，天理教南海大教会，1976年。
(54) 山根理一編著『実録・満州天理村　残留孤児たちは，いま』1982年，天理教道友社。山根理一・玉江編『満州天理村残留孤児　祖国への道』（私家版），2005年。
(55) 鶴見俊輔『戦時期日本の精神史』28頁，岩波現代文庫，2001年。
(56)『天理時報』昭和16年１月26日付。
(57) 池田一之『記者たちの満州事変―日本ジャーナリズムの転回点』171頁以下，人間の科学社，2000年。
(58)『真柱訓話集』第25巻，332頁，天理教教義及史料集成部，1966年。
(59) 藤原作弥『満州，小国民の戦記』18-19頁，新潮社，1984年。

〈付記〉 天理教関係の引用文献の内，教団機関紙の『みちのとも』（月刊），『天理時報』（週刊）はそれぞれ天理教道友社より刊行。『天理教青年会史』（第４巻）は天理教青年会より1986年刊行，『天理村十年史』は天理教生琉里教会より1944年刊行されている。